

あけのほし 2016年2月14日

「聖書との出会い」

菊田行佳

「イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、『何を求めているのか』と言われた。…イエスは、『来なさい。そうすれば分かる』と言われた。」

(ヨハネによる福音書1章38, 39節)

埼玉で30年間高校の教職に就いて来た平田栄一さんという方がいます。平田さんが教え子たちにアンケートをとって、今一番気になること、悩みは何かと聞いてみたところ、やはり受験や就職の悩みが圧倒的でした。この結果は今も昔も変わることなく、ご自分もやはり同じように、無味乾燥な受験勉強に何の意味があるのか、そもそも自分は何のために大学へ行こうとしているのか等々、さまざまな迷いや葛藤がふつふつとしていたころのことを思い出すと高校生の頃を振り返っています。

それでも1973年、第一次石油危機が起こった年、高校三年生になった平田さんは、自分の進学を「是非とも大学四年間の内に、人生の方向性を見出そう」というものを掲げました。自分の将来に対して抱えていたもやもやした心を払拭して迷うことなく社会に出たいと考えたのです。

霧かかる無月の海のきびしさに 新たに出づる暖かきもの

当時の心境を謳った平田さんの歌ですが、今から思うと人生に迷うことのない「方向性」を見つけようなどとは甘すぎる考えだったとのことですが、それでも当時の気持ちとしてはそれなりに真剣なものでした。

■ 聖書との出会い

1974年春、慶応に進学した平田さんは、日吉のキャンパスでギデオン協会発行の英和対照新約聖書をもらいました。しかし、その聖書の頁をめくるということはなく、高校時代からおこなっていた音楽活動に熱中します。民謡からフォーク、ロック、ソウルまで、さまざまなジャンルの音楽に触れました。一日の活動が終わるとそのまま友人の下宿に上がり込んで、夜通し語り明かすこともしばしば。音楽、恋愛、生き方等々話題は尽きません。

そうした友人の一人に、真面目で心優しく、いつも不器用な作り笑いを浮かべている、後輩のM君がいました。残念ながら英語の単位を二年続けて落としてしまい、当時の言葉で「ノイローゼ」にかかっていたとも聞いていました。彼が退学を余儀なくされた頃、何人かで彼の下宿に押しかけ、じっくり話し、そして飲みました。自由に遊んで、適当に単位を取り、大企業に就職していこうとする学生が多いなかで、M君の生き方は対照的でした。

安下宿の M 君の本箱には哲学や宗教関係の書物が整然と並べられていましたが、その中に表紙の擦り切れた分厚い新旧約聖書を平田さんは見つけました。もちろん M 君が悶々とした生活のなかで聖書だけに没頭していたわけではないでしょう。しかし当時の平田さんの頭のなかでは、M 君の不器用な生き方と手ずれた聖書、それが短絡的に結びついてしまったのだと言います。聖書とは人をあらぬ方向へと導くもの、という恐れにも似た強い印象を持たれました。

が一方で、それほどまでに人生を変えてしまう本であるならば、もしかすると、平田さんがずっと抱えてきた、あの「霧かかる無月の海」を前にしたような不安を解消してくれる「暖かきもの」がそこにあるかもしれない、そんな予感とも期待ともつかぬものがチラッと脳裏を過ぎったのも事実だったと言います。

平田さんが後に生涯にわたって師と敬うことになる井上洋治神父という方がいます。その井上神父がキリスト教に入信する前の学生時代、あるハンセン病院を訪れた時のことを次のように回顧しています。

「それは、なにか、私はゆるされている、という思いにも似たものでした。

内心びくびくしながらも、表面上は何でもなさそうに振る舞い、たった一日だけ友人のように強いて行動しながら、翌日はほっとしたような思いで世間に帰って行く、そのようないわば偽善的な私をわかりながら、しかも、それでいいんだよとでも言っていてくださるような、あの年老いた病人のかたの姿でした。そしてそれと関連して、ふっと私の頭をかすめたものは、ガランとした病室のベッドの上に置かれていた、うみで頁もところどころくっついてしまっている聖書なのでした。

聖書とはいったい何が書いてある本なのだろうか、ろくに聖書に関する知識も持っていなかった私は、翌日、木漏れ日の美しい雑木林の中を、そんなことを考えながら歩いたのを今もはっきりと覚えています。

それが私の人生における聖書とのいわば初めての真の出会いであり、また同時に、私の人生をとらえ、私の人生を完全に変わってしまったイエス・キリストというかたとの出会いなのでした。」

平田さんは、この若き井上青年の偽善に対する後ろめたさを十分知った上で、「それでいいんだよ」と暖かく包み込んでくれた「年老いた病人のかた」の姿と、学業に行きづまりながらも、ほほえみをたたえてわたしたちに優しく接した M 君が重なるのだと言います。時代と状況こそ異なりますが、あの「年老いた病人のかた」が井上青年に抱かせた「聖書とはいったい何が書いてある本なのだろうか」という思いと、M 君が私に与えた、聖書に対する「予感と期待」には共通するものがあるように思われています。

平田さんにしろ、その師である井上神父にしても、聖書との出会いは、まず人との出会いであることがわかります。人生の成功者がたどる道を歩んでいるとは言い難い M 君や、ハンセン病をかかえて世間から取り残されて生きておられるご老人のその生きる姿に触れた時、平田さんも井上神父も、聖書の中に人生の歩みを変えてしまいかねない「予感と期

待」が与えられました。自分が人生に求めているものが何なのか。その問いを引き出すことをさせた人との出会いを、井上神父は後から振り返って、それは実はイエス・キリストとの出会いだったのだと回顧しています。イエスは「来なさい、そうすればきっと分かるから」と、そう言って二人を誘われたのだと言えるでしょう。

(平田栄一著「心の琴線に触れるイエス」聖母の騎士社を参照しています。)